

静脩

1991年12月

Vol. 28, No 3

The Kyoto University Library Bulletin

鈴鹿本 今昔物語集をめぐって

文学部教授

安田 章

10月8日の夕刊各紙は、今昔物語集の鈴鹿本全9冊（巻二・五・七・九・十・十二・十七・二十七・二十九）が、その朝、所蔵者の鈴鹿家当主の紀氏から本学附属図書館に寄贈されたことを一斉に報じた。鈴鹿本が、今昔物語集の現存写本の中でも最古の、かつ、現存諸本のいずれをも従える、つまり祖本の位置にあるものであることは、広く知られていたが、蠹蝕の甚しいこともあって、各紙が鈴鹿本を「幻の写本」と称していたとおり、誰もが容易に披見し得ない、まさに高嶺の花的存在であったから、このニュースは、大きな感動を以って諸学界に歓迎されたに違いない。これまで何人の今昔物語集研究者が鈴鹿本を実見したことであろうか。

この本の存在が広く学界に知られるようになったのは、大正4年12月、京都帝国大学文科大学の機関誌『芸文』に掲載された、当主の父君、鈴鹿三七氏の手になる「今昔物語補遺」からであろう。巻二・十七の、「従来史籍集覧本にも丹鶴叢書本にも載せられてない未刊のものである」説話24が、その号から翌年にかけて、『芸文』誌上に紹介され始めたのであった。改めて大正9年11月、鈴鹿

三七氏は、氏の曾祖父、この本を購入された鈴鹿連胤（明治4年薨）五十年祭記念に、その「未だ世間に全く知られてゐない部分」を、より原本に近い形で、『異本今昔物語抄』として公刊された。この『異本今昔物語抄』の本文が、そのまま芳賀矢一纂訂『攷証今昔物語集』（大正10年刊）に収録されて、世に知られるところとなったわけであるが、鈴鹿本全9冊の本文が、読み易い形で、翻刻・提供されるまでには、なお40年の歳月を必要とした。日本古典文学大系（岩波書店）の『今昔物語集』（昭和34年～38年）がそれであった。古典文学大系本は確かに人々の渴を医しはしたけれども、用途によっては、活字翻刻では隔靴搔痒、困ることもある。例えば、表記・用字を初めとして、本文の体裁を踏まえての成立・形成の問題まで、今昔物語集を論ずる際に、現存写本の祖本と目される鈴鹿本のありようそのものをどうしても調べなければならないのであった。

学界に登場して80年、鈴鹿本は、今昔物語集研究の基礎資料として多くの研究者に活用される方向に向けて、改めて一步を踏み出そうとしている。

『異本今昔物語抄』の、本文提示に先立つ解題に、鈴鹿三七氏は、

この九巻の残欠本はもと奈良附近の古寺に在つたものと想像せられるが確かな記録が残つてゐない、それが転じて我が家の有に帰したのは天保の末頃であらう……曾祖父連胤の努力によるものである。

と記されていたが、鈴鹿家の有に帰する以前の、天保4年(1833年)正月に、この本の巻十二を見た人があった。国学者伴信友である。彼は、その顛末を、

奈良人某ノ蔵テル古本ノ今昔物語集第十二巻一冊ヲ見ル、或人ノ計ラヒテタダ二日ヲ限りテ借ル事ヲ得テ校合セリ

で始まり、

此本全ク備リテ在ルニカ欠ナガラモノホ在ルニカ、イマダヨクモ聞定メカネツ、時アリテマタマタ得テミムヨシモガナ

と結ぶ「十二巻奈良本批校之間事」に書き記している。彼の念願——時アリテマタマタ得テミムヨシモガナ——は11年後に叶えられるところとなった。「十二巻奈良本批校之間事」に続く「追記」として、信友は、

天保十五年三月京ニアリテ鈴鹿筑前守連胤ノ近頃奈良ヨリ購得タリトテ秘蔵ル此物語集ノ古写本ノ闕卷ヲ乞得テ見ルニ、本朝部第十二第廿七第廿九ノ巻三冊アリ、其第十二巻ハ上件ニ記セル如ク既ニ己ガ本ニ校セル古本コレナリ……ソモソモ去シ天保四年ニ此古本ノ第十二巻ヲ見テ、欠ナガラモノホ世ニ有ラバト見マホシカリツルニ、十年ヲ経テ後今ユクリナク京ニ来テ件ノ二巻ヲ見ル事ヲ得タルゾメヅラシキ

と書き遺している。この記述から、信友が「奈良本」と称していたその本が、外ならぬ鈴鹿本であったことが判明するのである。

天保4年、巻十二1冊についての、しかも、「タダ二日ヲ限リテ」の調査で、彼は、奈良本の性格を見抜いていた。即ち、

其奈良本……通校スルニ、今ノ写本ハモト此奈良本ヲ写タルヲ次々ニ転写セルモノトミユ

これを今日の表現に改めれば、奈良本は現存写本の祖本である——ということになる。そして、その「証」として、彼は、

奈良本折口ノ方イタク蠹損シテ字ヲ失ヘル処多シ、写本ニ字ヲ欠タル処悉其蠹損ノ処ナリコレ今ノ写本スナハチ此奈良本ヲ以テ写セル証トスベシ

と述べているが、120年後、鈴鹿本を実見して、彼の「十二巻奈良本批校之間事」と別個に、同様の推断を下したのが、馬淵和夫「今昔物語集伝本考」(『国語国文』昭和26年5月)であった。

天保15年の調査において、信友は、「ソノ第二十七巻ノ第四十語ノ初張ノ左ノ末ノ行」の「紙端ノ縫下ニ虫損ノ間ニ字見ユルヲ、ヤヲラ推排キテ」奈良本を書写した時の「筆ササヒ」と見られる書き入れを発見した。それは、奈良本(鈴鹿本)の、更には今昔物語集そのものの成立論や成立圏の問題に直接結び付くはずもないけれども、書写の場について問題を提供した。この類の、本の綴じ目の部分、いわゆるノドの奥にある——全て料紙の端にあたり、袋綴に装訂すると綴じ込められて見えなくなる——書き入れは、酒井憲二「伴信友の今昔物語集研究」(『山梨県立女子短期大学紀要』第9号)「伴信友の鈴鹿本今昔物語集研究に導かれて」(『国語国文』昭和50年10月)によると、巻二十七にもう1ヶ所、巻十・十二・十七にそれぞれ1ヶ所、都合5ヶ所にあるという。

鈴鹿本の修復がどのようになされるものか知らないが、9冊の全てにわたって、総裏打を施す必要があるだろう。そのために、一度は綴糸を切って解体しなければなるまい。それは、書写後現形態に装訂される以前の1枚1枚に戻すことになるわけであるが、その際に、どのような、伴信友以来の新しい事実が出現するか、今から楽しみである。

「然モノセルホドニ其蠹損ノ僅ニ残レルガ塵トナリテ失」われて行くはずだから、修復作業は「紙ノ縫レ縮ミ或ハ堅マリテアルヲ小竈ヲモテ懇切ニ開キ意ヲ尽シテ細ニ」なされるに相違ない。その完成を待つ間にも調べてみたいことがある。

その一つは、信友は「奈良人某」と言い、鈴鹿三七氏は「奈良附近の古寺」とする、この本の出所についてである。鈴鹿本を収納してあった、見るからに古色蒼然たる箱には、「今昔物語集」と直接墨書されており、蓋の裏に印が捺されていたように記憶する。もしそれが読み解けるならば、そこがこの本の出所であると速断することは避けなければならないにしても、鈴鹿本（奈良本）、今昔物語集の享受、流通について、問題を投げかけるであろう。鈴鹿本が、単に今昔物語集研究のみ

ならず、広く中世文化史の研究に大きな便益をもたらして行くことは疑いない。

鈴鹿本の特異な形態と謎の多い伝流、書写の特異性の意味するところは、今後の研究が必ず引き継いで行かねばならない大きな課題である（池上洵一「『日本文学研究大成 今昔物語集』解説」）

今や真の意味での公開——複製本の作製・公刊の日が待たれるところである。

(03・12・01)

『西アフリカの歴史と民族』コレクション

アフリカ地域研究センター助教授

市川光雄

数年前の昭和天皇の大葬の礼には、アフリカからも国家元首や大臣クラスの高官が多数列席した。天皇及び天皇制に対する興味もあったであろうが、おそらくそれ以上にアフリカ諸国の関心が、経済大国日本が果たすべき「国際的役割」にあったことはまちがいない。日本からの援助を期待して、このときにはたしてどのくらいの会見がおこなわれたのであろうか。その時の様子を伝えるテレビを見ていて啞然としたことを覚えている。それは中央アフリカのある国の代表と会見した国会議員の談話を伝えたものだが、この議員は、「アフリカにこんな国があることは知らなかった」と語っていた。アフリカの国名を知らなかったこと自体も問題ではあるが、それ以上に驚かされたのは、日本の代表として会見したこの議員がマス・メディアをまえにして、アフリカに関する無知を恥じる様子がまるでなかったことである。アフリカと日本との関係はまだこんな程度のものであったのかという思いであった。

植民地化以前からアフリカに深くコミットしていた西欧諸国とくらべて、日本におけるアフリカ理解や研究が遅れていたのはある意味ではやむを得ない。研究に必要な基本的な資料さえ、日本ではほとんど手に入らなかったからである。また、

日本がアフリカとの間に植民地支配というシビアナ関係をもたなかったことを考えれば、これまで比較的関心が薄かったのも理由のないことではない。しかし現在のアフリカは51の独立国を有し、国連の全加盟国の3分の1近くを占める大勢力である。日本との経済的な関係も深まり、アフリカ諸国に対する政府開発援助は東南アジアに次いで2番目となっている。今後ますます日本とアフリカ諸国との関係が強化されてゆくことはまちがいないであろう。過去において日本とアフリカとの間に密接な関係が形成されなかったのは事実であるが、逆にいえばこれは、植民地支配によって歪められた西欧諸国の視点とは異なる見方を日本が示し得ることを意味する。そうした認識に立って、最近日本でもようやくアフリカに対する正当な関心が芽生えてきた。このような状況において、このたび本学中央図書館に、西アフリカの歴史と民族に関する文献資料のコレクションが設置されたことはきわめて意義のあることと考える。

本コレクションを所蔵していた故ダグラス・ジョーンズ博士は、イギリスにおけるアフリカ史研究の第一世代に属する学者である。リバプール大学で歴史学を専攻した後、1951年に、新設されたばかりのロンドン大学東洋・アフリカ学研究所の

西アフリカ史部門に赴任した。以後、1979年に病没するまで同部門においてアフリカ史の研究をつづけたが、その間、1954～1955年に黄金海岸（現在のガーナ）の大学において客員講師をつとめている。このときに北部ガーナ及びブルキナファソへの調査旅行をおこない、その成果を1962年に「Jakpa and the Foundations of Gonja」として発表している。これを除けば、ジョーンズ博士には長期に及ぶアフリカ滞在の経験やそれをもとにした研究はない。おそらく病気がちで健康に自信がなかったために、本国における文献研究の道を選んだのであろう。これ以降はもっぱらイギリス国内において植民地化以前の西アフリカ史の研究に専念するとともに、膨大な文献を渉猟して、それらのレビューの作業に携わった。同時に自身でも、初期の探検家、宣教師の旅行記や、植民地行政官の記録、さまざまな分野の専門書等、西アフリカに関する資料の収集を精力的におこなった。

本コレクションには、19世紀以前に出版された初版本や稀覯本など古色蒼然とした装丁のものが数多く含まれており、ジョーンズ博士が単なる資料としての価値以上のものを求めてこれらの書物を収集したことが窺われる。本コレクションはこの愛書家の碩学が生涯をかけて収集した精髓といってよい。かつては、「その人の蔵書をみれば学者としての質がわかる」といわれたが、図書館の整備された今日ではこの言葉はほとんど意味をもたなくなってしまった。現在ではむしろ、研究者個人の蔵書よりは、研究者が利用する図書館等にどれだけの文献が整っているかということの方が重要である。個人の蔵書にもとづいて研究がおこなわれた最後の時代を生きた碩学の蔵書が、こうして大学の図書館に収められることになったのも研究体制の変化を物語るものであろう。

本コレクションがカバーする西アフリカは文化的にも歴史的にも極めて重要な地域である。紀元前数千年には、この地域のサヴァンナ帯でヒエ類等の雑穀栽培を主とした独自の農耕が発達していた。今日、世界各地に普及しているゴマ、okra等はいずれも西アフリカ原産の栽培作物である。またこうした古い伝統を背景に、ナイジェリア・

カメルーン地域ではいわゆるバントゥー系の農耕社会が成立したが、彼らがやがて中央アフリカ森林地帯の外縁を経由して東部及び南部アフリカ方面に拡散し、今日のケニア、タンザニア、ウガンダ、ザンビア、マラウイ、ジンバブウェ、南アフリカなどにまで分布を広げたのである。西アフリカ地域はこのような広い分布と古い文化的伝統を有するバントゥー社会の発祥の地でもある。さらに西アフリカでは、サハラ南北を結ぶ長距離交易が古くから発達しており、西欧社会との接触以前にニジェール河畔のトンブクツなどに交易の拠点となる都市が形成されていた。

このように古い歴史と独自の文化を持ちながらも、西アフリカの沿岸地域は、大航海時代以降いちちはやく象牙、金、そして奴隷などの交易を通じて世界経済に組み込まれていった。さらに19世紀末の植民地化以降には、植民地政府によるカカオやコーヒー等の換金作物の導入や森林伐採などによって急速に森林が破壊され、土地が疲弊してゆくことになった。西アフリカはこのように、アフリカにおけるさまざまな問題点が集約されている地域でもある。

本コレクションは合計1129点、1548冊から成っており、西アフリカに関する最近のコレクションとしては最大かつ最良のものといえてよい。その内容構成は、西アフリカ全般に関するもの280点、西アフリカ経済史に関するもの51点のほか、国別・地方別にナイジェリア270点、ガーナ及びトーゴ170点、セネガル・ガンビア・モーリタニア131点、カメルーン44点、シエラレオネ39点、ダホメ30点、リベリア16点、ギニア17点、コートジボアール11点、となっている。英語圏のみならず、西アフリカの3分の2を占めるフランス語圏の国々に関する文献が多いことにも注目する必要がある。

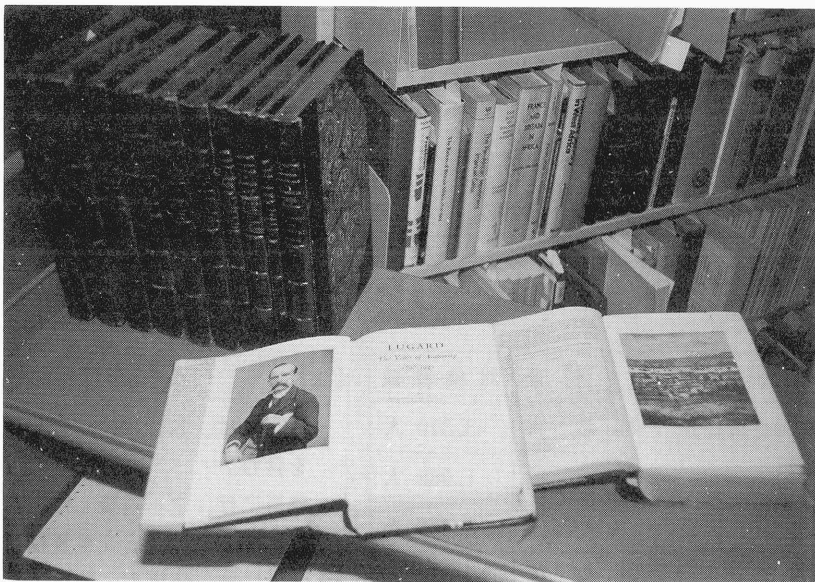
植民地化以前のアフリカ史の研究においては、アフリカ人による口頭伝承のほか、初期の探検家や宣教師等の記録が基礎資料となるが、本コレクションにはそうした資料も多数含まれている。1900年以前に出版された25篇の代表的な旅行記のほとんどがこのコレクションに収められている。しかもその中には、アフリカ大陸の西岸から出発

して初めてニジェール川の内陸部に到達したマンガ・パークの探検の記録「Travels in the Interior Districts of Africa」の第二版（1799年出版）や、アラブ人に変装してトンプクツに潜入した後、サハラ砂漠を越えて地中海まで帰還したルネ・カイエによる英語版報告書「Travels through Central Africa to Timbuctoo」（1830年初版）、リビアのトリポリからサハラを越え、トンプクツを経由してナイジェリアのカノまで、5年の年月をかけて到達したヘンリー・バースの報告書「Travels and Discoveries in North and Central Africa」（1857、58年初版）などの学術的にも貴重な稀覯本が少ない。

1885年のベルリン会議において、アフリカは西欧列強の植民地に分割された。これ以降アフリカでは政治、経済、社会の面において急速に植民地化が進行するが、本コレクションにはこのきわめて重要な時期に関しても植民地行政官の記録等の貴重な資料が数多く含まれている。

1960年代初めのアフリカ諸国の独立以降の文献ではナイジェリアとガーナに関するものが充実している。また、1967年～1970年のナイジェリアの内乱に関する文献や、北部ナイジェリアの首長国の歴史とその現代政治に対する影響など、現代アフリカを理解するための歴史的背景に関する文献も見逃すことができない。

このようにみえてくると本コレクションは、植民地化以前の西アフリカ社会と、その植民地政策及び独立以降の変貌を追跡するための不可欠な資料であることがわかる。実際、本コレクションの特徴は、多くの稀覯書の存在もさることながら、これだけで西アフリカにおける歴史の流れを追うことができるような広範囲の基礎資料や専門書が網羅されていることにある。



平成2年度 附属図書館利用実績統計

(対象期間：平成2年4月1日～平成3年3月31日)

蔵書数	723,047 冊
-----	-----------

内訳	和書	468,770 冊	洋書	254,277 冊	和・洋比	65 : 35
----	----	-----------	----	-----------	------	---------

(平成3年3月31日現在)

*開架図書 62,834 冊 (和書) 6,168 冊 (洋書) 69,002冊 (計)

*雑誌タイトル数 19,349 種 (和雑誌：9,227 種 欧文雑誌：10,122種)

※ 外国雑誌センター、工学部共通及び化学系雑誌等を含む。

開館延日数	263 日
-------	-------

内訳	平日	218 日	土曜日	45 日	開館延時間数	2,852 時間
----	----	-------	-----	------	--------	----------

入館者数	644,030 人
対前年度比	4.9%増

内 訳	学内者入館		学外者入館		開館日一日当り	2,449 人
	入館機	マニュアル	閲覧	見学	ク一時間当り	226 人
	人 638,824	人 3,512	人 1,161	人 533	ク一日当り最多	4,530 人

【注】・マニュアル：忘れたり、紛失等による利用証不携帯者による入館。

・閲覧：特別閲覧願(学外者)手続きによる入館。

・見学：事前見学申請なしの見学者による入館。

尚、利用申請中の者及び学外者のうち国立大学共通閲覧証等による入館者数は含まれておらず、正確には記録された数の約一割強位の入館者があるものと推測される。

入庫検索者数	9,110 人
--------	---------

開館日一日当り	35 人	入館者比	1人/71人
---------	------	------	--------

対前年度比：4.8%減

利用対象者数	22,613 人
--------	----------

(平成2年9月30日現在)

※利用対象者数：

利用証登録者数

内 訳	身分	対象者数
	教官	3,310 人
	職員	1,988 人
	大学院生	3,606 人
	学生	13,084 人
	その他	625 人

【注】

・教官には、名誉教授、定年退職した教官等を含む。

・職員には、定年退職した職員等を含む。

・大学院生には、研究生及び研修員等を含む。

・学生には、研修生、聴講生及び医療技術短期大学生を含む。

・その他には、卒業生、生協職員及びスタンフォード日本センター学生等を含む。

総利用冊数(総利用人数) 122,353冊 (53,705人)

学内・外利用構成比(冊) 92 : 8

対前年度比 : 1.9%増

貸出利用冊数(貸出人数) 81,604冊 (43,648人)

対前年度比 : 3.2%増

※貸出対象者 : 本学学生及び教職員

区分	開架(冊)	書庫(冊)	計(冊)	比(%)	教官(冊)	職員(冊)	院生(冊)	学生(冊)	利用人数
和書	68,590	10,773	79,363	97 : 3	3,568	2,059	16,006	57,730	43,648 人
洋書	1,545	696	2,241		339	540	802	560	
計(冊)	70,135	11,469	81,604	開館日 一日当り 298冊	3,907	2,599	16,808	58,290	一人一回 当り 1.9冊
構成比(%)	86 : 14				5	3	21	71	

閲覧利用冊数(閲覧人数) 40,749冊 (10,057人)

対前年度比 : 0.1%減

※閲覧対象者 : ①本学学生及び教職員 ②学外者等

※閲覧 : 当日利用された閲覧証の記録を
基に集計。自由接架による利用
数は把握できない。学内利用者
の普通図書の利用(一時貸出を
含む)は貸出とした。

学内者閲覧利用冊数(人数) 30,711冊(8,107人) 対前年度比 : 3.0%増

学内者対学外者利用比(冊数) 3 : 1

学外者閲覧利用冊数(人数) 10,038冊(1,950人) 対前年度比 : 10.0%減

区分	利用冊数(冊)			学内・ 外比 (%)	利用人数(人)		
	学内	学外	計		学内	学外	計
普通図書	—	4,652	4,652	—	—	772	772
貴重図書	995	1,945	2,940	34 : 66	163	166	329
特殊資料	832	313	1,145	73 : 27	191	51	242
参考図書	2,735	91	2,826	97 : 3	1,651	55	1,706
新聞	15,957	225	16,182	99 : 1	1,326	82	1,408
雑誌	10,192	2,812	13,004	78 : 22	4,776	824	5,600
計	30,711	10,038	40,749	75 : 25	8,107	1,950	10,057

【注】資料の利用単位は形態の違いには重み
を加えず、すべて“1”冊とした。

※特殊資料 : マイクロフィルム及び
マイクロフィッシュ資料

施設利用	タイプ室	169件	共同研究室	75件	研究個室	145件
------	------	------	-------	-----	------	------

「アメリカの大学図書館の現状と課題」(要旨)

ノーザンイリノイ大学教授 T. F. ウエルチ

まずアメリカ図書館界の最近のもっとも大きな出来事のひとつとして、library school (graduate) の閉鎖について報告したい。

Library school は1978年以来14校閉鎖された。school は生き残るために、計算機科学などの学科新設、共同学位の新設、カリキュラム再編成などの努力をしているが、閉鎖は今でも続いている。school の数が最も多かったのは1982年3月時点での70であり、1978年以来7.8%減少した。1990年にColumbia大学のlibrary school (Melvil Deweyが1887年に創設したアメリカで最も古いもの)の閉鎖が発表されたのを機に、librarianshipとlibrary schoolについての議論が活発になった。Marion Parisは、閉鎖の理由は経費削減ではなく大学管理者側の政治的な判断であり、要因として、図書館学の定義のあいまいさと、教員の大学内の孤立があると指摘した。私自身の経験から言うならば、図書館学の根源的な特徴は書誌の組織化であり、図書館学はその根本にかえるべきである。解決のためには図書館学の基礎を書誌の組織化に置き、教育の方針を明確化して独自性を強調すべきであり、また教員は大学全体と友好関係を作ることが重要であると考えます。

次に大学図書館をめぐるその他の諸問題について報告したい。

予算縮小は1970年以来続いており、サービス時間カット、予算カットが行われている。ネットワークに関しては、National Research and Education Network (NREN)の開発法案が準備されており、実現すれば学術情報流通に大きな影響を与えるであろう。またAssociation of Research LibrariesはEDUCOMとCAUSEと合同でCoalition for Network Informationを組織化した。これは全国的なネットワーク上での情報の組織化を扱うものである。

逐次刊行物は価格上昇を続けており、新聞契約

解約と寄付による再開、USBE (逐次刊行物補充センター)の倒産と別会社によるその再開などが起こった。

図書館サービスについては、多文化に対応したプログラム展開が新しい。またbibliographic instructionは中部大学高等教育委員会の活動により進展している。

人事の問題ではマイノリティ雇用問題が常に話題となる。マイノリティ用のインターンプログラムを実施している例がある。2、3年来女性司書の副学長昇格が増加しているが、affirmative action policiesの展開も一因となっている。

CD-ROMサービスは、普及するにつれて、オンライン代行検索に対する需要の減少と、複雑なオンライン検索依頼の傾向の可能性が考えられる。技術面ではネットワーク上での複数のディスク利用(CD-ROM server)が実現した。

最後に日米大学図書館会議について経緯を話したい。

会議は、1986年IFLA東京大会の際に開かれたワンデーセミナー以降は、それ以前と比較して、日本側の積極的な姿勢を反映して、際立った進展がみられる。各会議の共同声明(委員会の設置、会議の日米以外への拡大など)は、完全な形では実現されていないが、最近2回の共同宣言では、実現のために現実性をもたせている。次回会議にむけて、専門図書館員、知識産業界の主題専門図書館員の参加を日米双方で検討中である。来年第5回が予定されているが、反省点を取り入れたいと思う。

(本稿は平成3年9月30日ノーザンイリノイ大学のセオドア・F・ウエルチ氏を迎えて附属図書館において約100名が参加して開催された近畿地区国公立大学図書館協議会・講演会の要旨である。講演は日本語で行われた。

なお講演会の副題「日本の大学図書館との比較」については、講演ではあえてふれられず、出席者個々の判断で比較して欲しいということであった

が、質疑応答では、人材、サービス面でアメリカと日本でもっとも異なるのはレファレンスサービスの質と量であることが強調された。

図書館職員長期研修参加記

医学図書館 原 裕 之

昭和44年（1969）に始まった長期研修に今回参加させていただきましたので、研修の様子を簡単に報告いたします。日程は、7月15日から8月2日までの3週間にわたり、受講生は北海道から鹿児島まで総勢42名でした。

前日午前10時過ぎのひかり号に乗り込み出発。東京駅に降り立った時、猛暑の関西に比べてやや涼しく感じました。筑波に着いたところが図書館情報大学への道を間違えてしまい道順を訪ね訪ねようやくの思いでたどり着きました。研修生の宿舎は、夏休み中の学生寮を一時借用とか、これは文部省の配慮です。居住の学生は抽選で長期研修生及び司書講習生用に明け渡すそうです。図書館情報大には当然、司書課程があり現職だけの司書講習を開催しています。

明けて研修初日、研修会場は図書館情報大唯一の冷房装置のある階段式講義室。冷房も人によりけりで、最初の頃冷房で体調を崩した人がいたようです。オリエンテーションで筑波の水は悪いので生水は飲まないようにとの注意があり、翌朝からお湯を沸かすのが日課になりました。

最初の講義は、大学行政の中の図書館運営に関するものでした。一般に、図書館員は、行政手腕に欠けていると言われているだけに興味深く拝聴しました。教授会を持たない図書館が力をもてないのは当然であり、図書館は無力の組織という考えを前提として、図書館員が実力を示し、大学という組織の中で理解を得るような努力が必要とのお話でした。

体育の実習は、去年まではソフトボールだったようですが、今年は体育館を使つてのバドミントンでした。職員との代表による試合中、けが人が

でたのは残念なことでした。けがをした人はその後ギブスを巻いて研修を最後まで終了したのには驚きました。

新しい大学図書館サービスのあり方に関する講義では、これからの図書館サービスを考える上で参考になるものでした。今後求められる目に見えるサービスとは、遡及入力の実施によるOPACをはじめ、CD-ROMの利用やドキュメント・デリバリサービスの展開などであり、情報のことは何でも応じることのできる図書館へと発展すべきだというのがその内容でした。

大学図書館の相互協力の講義では、いかなる図書館も一館では利用者の要求を満たせられない状況になってきて、その克服のために資源共有システムの構築が益々求められて来ており、現物貸借も含めた対応が求められているとのことでした。

東京工業大学では、雑誌の全文を光ディスクに保存して利用に供する実験を行っていました。ここでも、著作権の問題が大きな障害となっており、外国雑誌は1タイトルだけで著作権料を支払って行っているとのことでした。

学術情報センターが、筑波大学の一隅にこじんまりとあり、建物が余りにも予想とはかけ離れて貧弱なものには驚きました。また、以前採録編集に携わったことのある「経済文献季報」がデータベース化され国内文献に限ってとはいえ、「経済文献索引データベース」としてサービスが開始されるとのことで感慨深いものがありました。学情のILLシステムについては、来年の4月から本稼働とのことですが、私の館では相互貸借業務の一部をパソコン処理をしている関係もあって処理がなお複雑になるのではと不安を覚えました。

グループ討議では、主に情報提供サービスや学術情報システムのことが討議されました。目録の質のことや全点入力のことも討議されましたが、京大における機械化の現状を十分把握していなかったため畿北からの参加者にフォローしていただくなど迷惑をかけてしまいました。

閉講式の後、来年の同窓会の担当を決めて3週

間の研修をようやく終了しました。研修よりもコミュニケーションで盛り上がった3週間だったかもしれませんが、今後の人的全国ネットワークの新たな展開を期して散会いたしました。

最後に、長期にわたる研修に快く送り出して下さった職場の皆様をはじめ関係者の方々にお礼を申し上げます。



目録システム（地域）講習会を開催

附属図書館では、学術情報センターとの共催で、9月30日（月）から10月4日（金）までの5日間、本館の地域共同利用室で、平成3年度目録システム講習会（地域講習会）を下記のとおり開催しました。

記

第1日目：目録システム概論、目録情報の基準Ⅰ
（学術情報センター）

第2日目：端末操作、端末操作実習、検索総論、
検索技法

第3日目：登録総論、登録実習（所蔵のみ、階層なし）

第4日目：登録実習（階層あり、物理単位、修正）
目録情報の基準Ⅱ（雑誌）、雑誌登録実習

第5日目：雑誌登録実習、レビュー、まとめ及び
質疑

受講者：近畿北部地区の5大学から8名

以上



国立七大学附属図書館協議会等の開催

去る11月15日、本館大会議室において、文部省から鳴野学術情報課長、井上大学図書館係長並びに北大をはじめ七大学の附属図書館長等の出席を得て、標記協議会が開催され、「今後における大学図書館のあり方」など7つの諸問題について協

議されました。

また、前日の14日には、同七大学図書館事務部課長会議が開かれ、「完全週休2日制（週40時間勤務制）への対応について」など6つの協議題について情報交換が行われました。